社会的要求性 (Social desirability) に関する研究*

東京 都 立 大 学

野 口 明 子** ***

I 社会的要求性

§ 1 定 義

人格についての記述はその内容に関してみると非常に多次元である。しかし人格記述項目の内容はひとまずかっこに入れておけば多数の項目を同時に論ずることのできる単一な次元があるのではなからうか、そう Edwards は考えてその次元を社会的要求性 (social desirability) 次元と名づけた。すべての項目は社会的に要求されるものから社会的に要求されないものにわたる次元上のある位置を占めるというのである。

多くの項目を単一の次元にのせる手続きにおいて Edwards (1957b) は「ある特性が他人のうちに見出される時の望ましさ、望ましくなさ」を評価するようにと指示する。このことばからわかるようにかれ自身は「社会的」に要求されるとか要求されないとかいうことばを用いていない。

これに対して Fordyce (1956) はかなり明確な定義づけを行なっており、かれによると「(アメリカ社会において) どのような行動や感情や態度が社会的な是認を得るかについての一致した判断」が社会的要求性である。しかし De Soto ら (1959) は社会的要求性が Fordyce のいう社会的是認・否認の次元に属するよりもむしろ「よくあることへの望ましさ」(desirability for well-being) とよばれてしかるべきことを示唆している。また社会的要求性という概念と適応 (Wiener, 1959) あるいは精神的健康 (Kogan, et al., 1957) とは関係が深いと報告されたが、Block (1962) はこれを批判し、適応と社会的要求性とは別のものであり、社会的要求性はべつに真の精神的健康という意味での適応に基礎をおく必要はな

ただ慣習的なものへの斉一的な皮相的な服従を反映させるだけであると述べている。ともあれ Edwards が教示によつて社会的要求性の次元を操作的に定義した点には問題ないのである。

では Edwards は人格記述項目をこの社会的要求性の次元にどう位置づけるのだろうか。それには一対比較法、系列範疇法、等現間隔法などの心理学的な尺度化法を用いればよい。たとえば Thurstone (1959) が態度尺度を等現間隔法で作成した場合のように、個々の項目がどの程度社会的に要求されるか否かをいくつかの等間隔のカテゴリーにわりふり、所定の手続きで各項目の尺度値を求める。この尺度値がその項目の社会的要求性尺度値である。

Edwards によると尺度値の小さいものは社会的要求性の程度が低く、尺度値の大きいものは社会的要求性の程度が高いことを意味していたので、それ以後多くの研究者はこれにならつている。

§ 2 諸評価者群の社会的要求性尺度値

1. 性 差

Edwards (1953a) は Personal Preference Schedule (PPS) の 140 項目を用い、男子学生 86 人、女子学生 66 人に社会的要求性 (以下 S. D. と略す) の次元で評価させた。その結果、95 項が同一のカテゴリー内にその尺度値をもち、140 項のうちカテゴリー 1 つ以上のひらきのある尺度値をもつ項目は 2 項目しかないことを示した。また Interpersonal Check List (ICL) の 128 項を用い、大学生男女別に S. D. 尺度値で求めた 91 項が同一のカテゴリー内に落ち、その相関は .90 であつた (Edwards, 1957a)。その他、攻撃的な内容の陳述についての S. D. 評価 (Goldfried et al., 1962)、親子関係の規範意識評価 (大石, 1962)、矢田部・ギルフォード性格検査 (大石, 1964) についても性差はみとめられなかった。

Cowen (1961) は高度に要求される (望ましい) 人

* On social desirability.

** Akiko Noguchi (Tokyo Metropolitan University)

*** 旧姓 大石

格記述から高度に要求されない(望ましくない)人格記述項目全域にわたるような形容詞 209 を集め、それぞれ「わたくしは——の人です」というように考えさせて、それを S. D. 次元で 7 点段階に評価させた。評価者は学生で男 39 人、女 28 人、いずれも「人びと一般」という関係枠を用いるよう教示された。男女の平均的な S. D. 尺度値の積率相関は .99 であったが、個々の形容詞について男女別の尺度値の差を検定してみると 209 語のうち 23 語に対し 5% 水準で有意差を見出した。かれの分析によれば、S. D. 尺度値を全体としてみれば男女間に .99 という高相関があるが、個々の項目別に男女比較してみると女子の方がその連続体上の両極で男子よりもより極端な評価をする傾向のあることがわかる。Cowen と Stiller (1959) は S. D. の程度の高い形容詞だけを 30 集め、S. D. 次元で評価させたが、やはり同じ現象を見出している。さらに Cowen (1961) は S. D. の評価の変動を男女別にみたが、女子の方が変動は少なかつた。このように女子の方が男子より極端な評価をし、しかも変動量が少ないという傾向は、後述の「自分自身において望ましいと思う」場面(Cowen et al., 1961) や感情的反応を表明する場面(Cooper et al., 1962)を導入した場合にもみられる。

2. 年令差

S. D. 尺度値に及ぼす年令の影響については系統だった研究はみられないようであるが、Edwards (1953a) は PPS の文章について S. D. の評価を 20 才、20~30 才、30 才以上の 3 群に行なわせたところ、各群間の評価の一致度は非常に高いことを報告している。大石 (1962) は親子関係の規範意識を 16 才から 50 才代まで 7 群の評価者に評価させたが年代差による評価の差のないことを見出し、Cowen ら (1962) は人格記述の形容詞についての S. D. の程度を施設の老人と統制群としての若い入院患者、慢性分裂病患者、大学生とで比較したが老人の方がすべて形容詞をより好意的に評価する傾向を見出した。

3. 階級差、文化の差

社会・経済的地位の差、文化圏の差があつても S. D. 評価の一致度は高いことを示す研究例がある。

Fujita (1956) は PPS の項目を用い、日系アメリカ人の大学生 50 人に S. D. 評価をさせ、それを Edwards のアメリカ人学生 152 人の評価と関連させてみたが、期待に反し両群の評価の積率相関は .95 で評価者群の文化的背景の効果はみられなかつた。Klett (1956) と Lovaas (1958) も同じく PPS の項目を社会・経済的地位の異なる高校男女群に与えて評価させた。かれらを互いに比較してみると社会経済的地位の異なる人びとをひとまとめにしてもかまわないほど一致していたことが明らかにな

つた。そこで高校生がとりあげられるかぎり社会・経済的地位も S. D. 評価の重要な変数でないと考えられる。Mehlman ら (1962) も大学生について同様の結果を得た。

Cowen ら (1962) は老人を評価者にして S. D. 評価の検討を試みた。施設にいる男子老人 40 人、平均年令 64.8 才で教育年数 9~10 年、家庭にいる男子老人 40 人、平均年令 71.0 才で教育年数は同じく 9~10 年の 2 つの群を選んで比較対照した。項目は人格記述の形容詞で老人に理解できるものばかりである。2 群の老人の平均的な S. D. 尺度値の相関は .99 で全項目についての平均的な尺度値の差は有意でなかつた。しかし 2 群を相互比較するとどの項目についても施設老人の方がより望ましいと評価した。

4. 文脈

S. D. 次元で評価される人格記述項目も、それが置かれている文脈を異にすれば異なつた評価をされるだろう。あるいは同じ人格記述項目でもそれを書き表わす文体がちがえば、異なつた評価をされるかもしれない。

前者の問題について Cowen と Stiller (1959) は次のような報告をしている。S. D. 次元の全範囲にわたる人格記述の形容詞群から、社会的に要求される形容詞と中性的な形容詞 30 語ずつを選ぶ。それを男女学生に S. D. 評価させるのであるが、半数の評価者ははじめに社会的に要求される形容詞を評価してから中性的なものを評価し、他の半数は逆の順序で与えられた形容詞を評価する。その結果、中性的な形容詞は、はじめに要求される形容詞を評価したときの方がより望ましくないと評価されたし、望ましい形容詞については、中性的な形容詞をはじめに評価したときの方が、より望ましいと評価された。かれらはこの結果を先行経験による判断基準の移動によるものとし、順応水準理論 (Helson 1948) との関連で考察している。

第 2 の同じ人格記述項目でもそれを書き表わす文体がちがえば異なつた評価をされるかもしれないという問題については、Buss (1959) と Goldfried ら (1962) の研究をあげることができる。攻撃性に関連した項目が異なる 7 つの文体で表わされる。その文体は①統制的な意味でなんらの技巧をこらしていないもの(「わたしはかくかくの攻撃的な行為をする」) ②③自分が禁止や統制力に欠けていることを示すもの、④あることをやりたいという衝動はあるが、やろうかやるまいか迷っているような状態をあらわすもの、⑤自己説明的なもの、⑥世論との一致をねがうもの、⑦自己の行動を自覚し、それについて寛容であり、わずかな悪徳なら認容しさえするようなものである。10 項とこれら 7 つの文体とで 70 の文章ができ

あがるが、それを男女学生に与えて S. D. 評価させた。技巧をこらしていない文体での10項目の平均尺度値は他の文体のものに比して低かった。とくに自己説明的な文体での尺度値とはかなりの差がみられた。この文体は「わたしはかくかくの攻撃的な行為をするという欠点がある」といったもので、このように表現することにより社会的に要求されなかつたものをそれほどでもないと評価させる役を果たすのであろう。

5. 教 示

Edwards が用いた教示は、ある人格特性を他人に見出したとき、それがどの程度要求されるかを問うたものであり、一般的標準教示といわれる。これに対して評価者たとえば医者として、セールスマンとして、学者としての特性の要求性の程度を評価させるような教示を特殊的な教示という、Edwards (1957b) によれば、もし医者として要求される特性とセールスマンとして要求される人格特性とが異なるとすれば、異なつた教示で得られた尺度値間にあまり相関がないと考えられる。一般的な文化規範ともいふべき S. D. は一種の「標準」にすぎず、この標準と特殊的規範との潜在的な逸脱にはつねに関心を抱いていなければならない。

しかしこのような Edwards の示唆にもかかわらず、特殊教示のもとで S. D. を研究しているものはまだ見あたらないようである。ただ先述のように S. D. 尺度値が Edwards の標準教示によるときと、社会的に是認されることとか、よくありたいと願うこととか、(De Soto 1959), 自分が望ましいと思うもの (Goodstein et al., 1959) といった教示による場合との比較がなされているにすぎない。

Edwards の S. D. は「他人における特性の望ましき」であるが、Goodstein ら (1959) はそれと「自分自身のその特性の望ましき」との関係の問題にした。かれらは、Edwards の教示での S. D. と対照させるために PPS の項目を 100 人の学生に「自分自身が望ましいと思う」という教示で評価させ、Edwards (1953a) の評価との相関をとつたが、90 という高い相関を見出した。Edwards の PPS は異なる15の要求について評価させるもので、各要求にはそれぞれ9個の文章がある。このように要求のカテゴリーにしたがつて得られた Edwards と Goodstein らの評価とを比較したときに全体として差がないのであつて、PPS の項目全部を独立に得られた「自分自身が望ましい」と思う程度にしたがつて序列づけし、上位、下位の群に分けたとすると、両者の評価には差があるかもしれない。そこで Goodstein らは自分が望ましいと思う要求群では両教示での評価の平均に差

がないが、自分が望ましくないと思う要求群では Edwards の評価の方が Goodstein らのそれより有意に高く評価される傾向のあることを見出した。

Cowen と Budin ら (1961) もある人格記述の形容詞の望ましきの程度の評価を、人びと一般についてと、自分自身についてで比較したが、両者の相関は .98であつた。しかし人びと一般という教示の方が、自分自身についてという教示よりも極端な評価をしており、変動量が小さいことがわかつた。

さらに Cooper ら (1962) は S. D. という概念をとくに出さずに感情的な反応をあらわすよう計画された問題設定をして S. D. の一般性を調べようとした。209 語の人格記述の形容詞を「あなたは——な人だ」という形で与え評価者はそれぞれに対し「よい感じがする」「いやな感じ」といった感情的反応を7段階で表明する。男女学生46人の平均的な感情的反応とさきの Cowen と Budin らの研究 (1961) の「人びと一般において望ましい」評価と「自分自身において望ましい」評価とを関係させてみたところ、それぞれ .980 .985 という高い相関を得た。しかし個々の項目の評価は感情的反応を表明させる場合の方が他の2つの場合よりも、より極端な評価を受けやすく、変動も大きいことがわかつた。このことから Cooper らは、感情的反応をするという場面がより自我関与的なもので、より強力な主観的反応を引き出しうるとみている。

6. 臨床例

いままでみてきた研究例はどれも正常な評価者についてのものであつたが、分裂病患者、神経症患者 (Kogan et al., 1957; Cowen, Staiman et al., 1961) アルコール中毒者 (Zax et al., 1962), 性犯罪者 (Cowen et al., 1963) における S. D. の研究例もある。

公式に発表されたものでないが Kogan ら (1957) は ICL の項目を15人の浮浪者、アルコール中毒患者、結核患者と46人の神経症患者に与え S. D. 評価をさせた。これら2群の S. D. 評価と Edwards が大学生について得た (1957a) 評価との相関はそれぞれ .94 .95であつたという報告が Edwards (1957b) によりなされた。

Cowen ら (1963) と Zax ら (1962) はアルコール中毒患者、分裂病患者、入院患者、性犯罪者 (幼児姦) 大学生について人格記述の形容詞の S. D. 評価を比較した。各群間の相関は非常に高い正の相関を示した。しかし個々の形容詞については、アルコール中毒者と性犯罪者の評価は似ている。かれらは分裂病患者や、入院患者、大学生と比べて社会的に望ましい形容詞や望ましくない形容詞に対して極端な評価をしつがらない。この連続体

の中央に固執する傾向は社会病質的人格者にとつて一般的な反応特性であるように思えると Cowen らは述べている。またその評価は大学生らと比べると変動量が大きい、分裂病患者ほど大きくないことが示された。

この章で概観した研究例から、人格記述項目の S.D. 評価は、評価者や教示が異なっても全体としての相対的な関係は一定に保たれていることがわかった。しかしこれらの項目の評価を個別的にみていくと、評価者が変わることによって、ある評価者群は同じ項目をより極端に評価したり、他の群よりもその評価の変動が少なかったりするという一貫した傾向を示すことが明らかになった。ここから S.D. 評価のしかたそのものに人格特性のひとつの徴候をみようとすまいき方もでてくる。

評価者群間の評価の間に高い正の相関があつたからといって S.D. はどの評価者についても恒常であるとはいいがたく、さらに個々の項目の内容と、そのもつ S.D. の程度との関係を分析していく必要があると思われる。

II 社会的要求性と承認の比率

人びとが人格検査で自己評価をする際、一定の反応をしようとする構えが働くことはすでに Cronbach (1946) によつて指摘されているが、前章に述べた S.D. の影響については Edwards (1953a) が最初の具体的研究者であつた。その後この問題は多方面から検討されるようになったが、それらの研究が共通して示すのは次のことである。つまり、自己評価において人格検査の人格記述項目のもつ S.D. に応じてそれらの項目は「はい」といわれたり「いいえ」といわれたりすること、社会的に要求されない項目は拒否され、社会的に要求される項目は受容されやすい、項目の S.D. の程度とその項目がどの割合の人びとに受容されるかという程度の間には高い正の相関があるということである。多くの研究法をみると人格検査項目の S.D. の程度をあらかじめきめておいて、他の評価者群には普通の人格検査を施行して各項目にかれらが「はい」といつた比率を求め、2変量間の積率相関を求めている。以下ある項目が「はい」といわれた比率を「承認の比率」とよぶ。

§ 1 自己記述と S.D.

Edwards (1953a) は 152 人の評価者に PPS 140 項目を S.D. 評価させ、他の 140 人の評価者にはその項目を人格検査の形で記名で与え両者の相関をとつたが、.87 という係数を得た。ICL の項目 128 項については S.D. と承認の比率の相関は .83 であつた。(Edwards, 1957a) 記名、無記名両事態で評価させたがどちらも同じような関係を見出した。

Rosen (1956) は MMPI の短縮した形のものを評価者に与え MMPI の標準教示と自分自身にそういう人格特性があれば望ましいと思うかという教示で評価させた。かれは Edwards の方法とちがい S.D. 尺度値にあたるものを上の教示により 2 件法で求めた。こうして MMPI の標準教示と S.D. 教示で得た「はい」といわれた項目数を数えて相関をとつたが、.87 を得た。また Cowen と Tongas (1959) は Bill の「適応と価値の指標*」(IAV) (1958) の 49 項目について 7 点尺度法で求めた S.D. と 5 点尺度法による自己評価との相関を大学生に関して求めたところ .906 であつた。

臨床的な場面からの研究では Sperber ら (1962) が精神疾患のある人について調べた。かれらは精神疾患のある学生 71 人を対象にし Kogan により S.D. 尺度値のすでに知られている ICL 128 項目によつて自己評価をさせた。S.D. と承認の比率との相関は .73 でけつして低くはないがさきの Edwards の .83 とは有意な差があつた。こうして Sperber らは神経症の人は正常な人に比して自分が社会的に望ましい行動傾向をあまりもつていないとみていると述べている。Kogan (1962) はアルコール中毒患者に ICL を施行し、かれらを「自分のことを悪くいう人」(Detractor) と多くの項目に『いいえ』という人」(Denyer) の 2 群に分けた。この 2 群に対し各項目の S.D. と承認の比率との相関を評価者別に求めたが、前者は平均して .30、後者は .82 であつた。こうして Kogan は評価者のサンプルにより S.D. と承認の比率の関係が異なることを指摘した。

Q テクニックを用いて自己概念の評価をした場合の S.D. の影響についても、Edwards (1955), Kenny (1956), Cowen ら (1960) がとりあげている。たとえば Edwards は 100 人の学生に PPS 135 項を与えて自己評価させると男女とも Q 分類で各項目に与えた平均的な重みとその項目の S.D. 尺度値との相関** が高く男 .84、女 .87 であると報告した。

§ 2 現実的自己と理想的自己と S.D.

前掲の Cowen と Tongas (1959) は IAV 49 項目につき自己概念、理想的自己についての平均的な評価を求

* 人格記述の形容詞 49 からできていて、自己概念、自己受容、理想的自己について、3 回、5 点尺度法で評価し適応状態を調べるもの。

** 自己評価と S.D. の関係は、かなり年少者にも確立していることが Cruse (1963) によつて示された。少なくとも理解できるような項目を用いれば小学 1 年生でも、承認の比率と S.D. 尺度値の間に高い正の相関をみることができる。

め、両概念のずれの程度および S. D. との関連を検討した。現実自己概念も理想的自己概念も S. D. との関係は密で、両概念は S. D. という変数から独立の意味を失うほど S. D. に色づけされているようだ述べている。両概念のずれと S. D. については、個々の項目の S. D. 尺度値が S. D. 尺度の midpoint から逸脱している程度と、両概念の評価のずれとで相関をとつたが -0.053 であつた。

Kenny (1956) は男女学生 4 人ずつに 25 項の自己概念項目を理想的自己について Q 分類させ S. D. との相関をとつたが、8 人中 6 人まで有意でその巾は $.25 \sim .82$ であつた。現実的自己概念と理想的自己についての得点の相関は 8 人中 7 人まで有意でその巾は $.35 \sim .85$ である。このように S. D. は自己概念に密接な関係があるとしたら、両自己概念のずれをもつて人格の適応の指標とするのはかなり限定されてしまうだろうと結論している。

自己概念と S. D. の関係をさらに探索して Cowen ら (1960) は S. D. の効果がよくでるような項目群と、その効果を減らすと考えられる項目群とを選び、現実的自己と理想的自己と S. D. の関係をしらべた。結果は S. D. の効果の強い項目群を理想的自己について Q 分類したときの S. D. との相関 $.982$, S. D. の効果が弱い項目群を評価した場合の S. D. との相関は $.899$ で前者の方が有意に高かつた。こうして Cowen らは自己概念を評価させるための項目群を作る際、S. D. 変数をあまり反映しないような方法を考えられると示唆しているがこれに関連しては後述する。

§ 3 他人の評価と S. D.

Edwards (1959a) は S. D. 変数が他人についての評価にも影響すると報告する。かれは ICL 128 項を次の 3 種の教示で与えた。1) 「好き」群 (男 57 人, 女 55 人) ではもつとも好きな同性, 同年令のだれかについて考える。2) 「嫌い」群 (男 73 人, 女 42 人) ではもつとも嫌いな人を考える。3) 「その他」群 (男 95 人, 女 73 人) では好き嫌いに関係なく、よく知っている 5 人を選びその人を ICL で記述する。

評価者が好きな人を記述するときは S. D. 尺度値と承認の比率の相関は男 $.93$, 女 $.95$ という高い正の値を示した。これに反し、嫌いな人を記述するときの両変数の相関は男 $-.38$, 女 $-.13$ で、さほど大きくはないが期待どおり逆相関である。「その他」群での両変数の相関は男 $.84$, 女 $.86$ でかなり高かつたが好きな人について記述する場合ほど高くない。

§ 4 データ処理の問題

以上みてきた研究は Kenny (1956) と Kogan (1962) の研究を除き、いずれも集団でまとめた資料に基づいて

処理し、S. D. と承認の比率の相関を求めたものである。ここに問題を見出したのは Taylor (1959) で、MMPI の項目に対する承認の比率と S. D. 尺度値間の相関を個人別にみた場合にも高い相関があるかどうかを疑つた。多くの個人が MMPI での反応に S. D. の影響を受けなくても、資料を集団でまとめて処理すると S. D. 尺度値と承認の比率の間に強い相関関係のあることもありうるからである。そこでかれは 70 人の精神分裂病患者を対象に、個人別に S. D. の相関を求めた。別にワシントン大学の学生 80 人に MMPI の S. D. 評価をさせ集団としての S. D. 尺度値を求めた。

結果を集団別にまとめてみると、ワシントン大学学生の S. D. 尺度値とこの患者の MMPI の承認の比率の相関は $.79$ で従来の研究結果にかなり近い。しかし個人別に相関をとるとその平均は比較的低く $.36$ であつた。この結果に基づき Taylor は資料を集団にまとめて処理すると S. D. と自己記述の関係を強調することになると指摘し次のように結論した。つまり方法論上の問題はあつたが、それにもかかわらず集団にまとめた資料に及ぼす S. D. 基準の影響と、個人の資料に及ぼす影響の差を弁別しようとする研究が必要であること、また MMPI は S. D. のひとつの尺度にすぎないといった単純な解釈をしてはならないということである。

Taylor の結果を支持するものとして Milgram ら (1961) は Edwards (1953b) の示した 15 の Murray の要求を 80 人の新入医学生に提示して次のような序列づけをさせた。つまりそれらの要求をあらわす項目を自分自身にもつとも適しているものから不適のものまでに序列づけることと、同一項目を成功をおさめる医者をもつともよく表わしているものから、もつとも表わしていないものまでに序列づけることであつた。前者は自己概念を表わすもので、後者は新入医学生の一の個人的な理想像、換言すれば医者として望まれる特性を問うもので先述の特殊な教示による。Milgram らは評価者を 2 群にわけ、ひとつには自己概念を評価させてから医者としての理想像を評価させる (S—P 群)、他の群にはその逆の順で評価させる (P—S 群)、その結果、S—P 群では集団にまとめた資料から、両教示で得た序列づけの列位相関は $.89$ で、個人別に処理した相関の中央値は $.63$ であつた。P—S 群では集団で処理した相関 $.95$, 個人別のその中央値は $.85$ であつた。前者の例では S. D. 変数だけが自己評価に働くわけでないという Taylor の結果を支持したが、後者のように理想像を先に評価すると S. D. 変数の影響は非常に大きく $.44$ 以下の相関を示したのは 40 人中 2 人しかいなかった。

Taylor の結論に対して Heilbrun ら (1961) はもし S.D. が承認の比率に関係するなら、資料を個人別に処理した方がもつと明らかになるはずだと考えた。かれらは PPS を男女29人ずつの学生に与えて標準教示で評価させ、2か月後それらの項目を S.D. 評価させる。これにより各評価者が一対の項目のうち自分で望ましいと評価したものを何回承認したかをパーセントであらわした。また別に集団でまとめて求めた各項目対の S.D. 尺度値のうち、より要求される項目を各評価者が承認した回数のパーセントを求めた。この2つの手続きによつて個人の承認の比率に及ぼす S.D. の効果を、集団でまとめて処理したものと、同一個人のそれとの両方から検討できる。結果は個人の S.D. セットが PPS をやる際の重要な変動因であること、評価者は3回に1回の割で項目対のうち社会的に要求される項目を承認したことを示した。また個人の S.D. 評価と承認の比率との関係はより密で、Taylor が MMPI を用いて得た結果と逆の結果を得た。Boe ら (1963) も MMPI 100 項を用いて同様の結果を得た。

これらの研究は研究者により結果の違いはあつても、人格をしらべるための質問紙に対する個人の反応が、かれ自身が評価したその項目の S.D. に関係しているのか、それとも平均化された集団の S.D. に関係しているかという問題をとりあげたものとして意義深い。このかぎりでは Edwards が行なつてきたような処理法では集団における S.D. と承認の比率の関係を明らかにするだけで個人差の問題は扱えない。しかし Edwards はここでもとどまるわけではなく S.D. 尺度 (S.D. scale) を作り個人差の問題へと進んでいく。

§5 S. D. 尺度

Edwards (1957b) は人格検査での反応に S.D. 規範が影響するのに個人差があることを指摘し、個人がこうした S.D. に影響される度合いを測定するため S.D. 尺度 (S.D. scale) を作成した。

Edwards の S.D. 尺度は次のように作られた。まず MMPI から内容的に異質な人格記述項目150を選び、それを社会的に要求されるようなしかたで反応しなさいという教示で評価者に与える。つまりある項目に「はい」と答えた方が社会的に要求されることだと考えれば「はい」と回答すればよい。これらの項目から評価者が一致して「社会的に要求される」回答をしたものを最終的に39選出した。これはいずれも後述の S.D. 得点の高い人と低い人とを弁別できるような項目である。この S.D. 尺度での得点のとりかたは社会的に要求される項目を承認したら1点、社会的に要求されない項目を拒否しても

1点、その他の回答には点を与えないようにして39項全部についての総得点を求めて各人の S.D. 得点とする。この得点を与えられるような回答を Edwards は「社会的に要求される反応」とし、得点の与えられないような回答を「社会的に要求されない反応」と名づけた。

この尺度39項のうち30項は「いいえ」と回答すれば得点を与えられるようにできている。もしこの30項全部に「いいえ」といい残りの9項に「はい」と答えれば、その人の得点は39点ということになる。Edwards はこの尺度を男子84人に与えてみると平均 S.D. 得点28.6、女子108人に与えてみると平均 S.D. 得点27.1、 σ は男女とも6.5となり、得点の分布はいくぶんかの負の歪度を示している。

こうしてできた S.D. 尺度を用いて Edwards は SD 得点と他の人格検査での得点との関係を求めていくが、両得点間に正の相関があるか負の相関があるかは、他の人格検査が社会的に要求される反応をすることによつて高い得点をうるか、あるいは社会的に要求されない反応をすることによつて高い得点を得るよう作られているかによる。そこで Edwards は具体的に S.D. 得点と人格検査の得点間の相関を求めた。たとえば Guilford-Martin 尺度の得点 (協調性、同調性、客観性に関し) と S.D. 得点との相関は .63, .53, .71 であり、MMPI の社会的に要求されない人格特性である依存性、社会的内向性、不安の尺度での得点と S.D. 得点の相関はそれぞれ -.73, -.90, -.84、さらに臨床的な尺度である Pt, Sc, D 尺度での得点と S.D. 得点の相関は -.85, -.77, -.61 であつた。

この S.D. 尺度が作られてから S.D. 得点を用いて評価者を分類し、人格検査における反応と S.D. の関係を問題とする試みがなされるようになった。

先述の Edwards (1959a) の研究では男女の評価者に自分のよく知っている同性、同年令の人5人を考えさせ、ひとりひとりについて ICL で記述させた。これにさきだち、評価者らは S.D. 尺度をやり、その得点によつて高得点群、低得点群に分けられた。この2群について ICL の承認の比率と ICL の項目の S.D. 尺度値との相関を求めたら男女とも高得点群の方が低得点群より大であつた。社会的に要求される項目に対しては高得点群の方が承認率は高く、社会的に要求されない項目に対しては S.D. 得点の低い群の方が承認率は高かつた。

人格検査ではないが、Norman (1962) は慢性分裂病患者的の自己評価と S.D. の関係を、修正した S.D. 尺度により検討している。評価者に簡単な作業をやらせ、成就水準を自己評価させるが、その際 S.D. 得点の高い群

は低い群に比べて有意に自分の成就水準を好意的に評価していた。さらにかれは要求水準と S. D. の関係を調べたが、S. D. 得点の高いものは要求水準も成就水準も高かったと報告した (1963)。

Taylor (1961) は質問紙法で態度測定をする際の S. D. と承認の比率の関係を問題とした、また人格検査で社会的に要求されない反応を多くする人は態度測定でもそうではないかと考えた。現行の態度調査は社会的に要求されない項目を多く含んでいるので、社会的に要求されない態度をあらわす尺度、社会的に要求されない人格特性を表わす尺度、社会的に要求される人格特性を表わす尺度を作り、各尺度の信頼性を評価して相関を求めた。その結果、社会的に要求されない態度を承認しようとする傾向と、社会的に要求されない人格記述項目を承認しようとする傾向および社会的に要求される人格特性を拒否しようとする傾向との間には正の相関がある。ここから Taylor は現行の態度尺度を用いる場合に一貫して働く S. D. の作用を考慮すべきことを主張した。

Marlowe ら (1961) は行動の動機づけ的な決定因を理解するために S. D. 尺度を用いようとしたが Edwards のそれは役立たないことを報告した。かれらは社会的承認の要求を測定するような新しい S. d. 尺度を作り、Edwards の S. D. 尺度と比較した。被験者はうんざりするような単調な作業を25分間させられ、そのあとでその実験についての態度を表明させられる。その結果社会的承認の要求の強い人つまり Marlowe らの S. d. 得点の高い人はその実験に好意的であつたが、Edwards の S. D. 得点と、この実験に対する態度との間に有意な関係はみられなかつた。それは S. D. 尺度の項目が本来ある徴候や不満の有無に言及しているからで、このように自己の適応といったことに関係のないような事態では行動の動機づけ的な決定因を理解できない。

§ 6 S. D. の統整

Edwards (1959b) は S. D. 得点と他の人格検査での得点との相関の大小に影響する要因をまず考え、それをもとにして人格検査での得点に介入する S. D. を統制する手段を考えた。

(1) ある検査で測定される人格特性がそれ自身社会的に要求されないものであるとすると (たとえば敵がい心を測定する)、一般にその尺度での得点のかぎとなる反応は社会的に要求されないものであろう。しかし人格特性自身は社会的に要求されないもので、しかも得点のかぎとなる反応が社会的に要求される反応であるような項目を見出しようとすれば、そういう項目を多く含む検査では S. D. 得点との相関が低いだろう。この仮説検証

のため Hanley (1956) は全項目の75%が社会的に要求されない尺度値をもつ Sc 尺度と、全項目の 52% が社会的に要求されない尺度値をもつ D 尺度とを用いてそれぞれの得点と SD 得点の相関をとつたところ、D 尺度の方が大であつた。それは D 尺度では項目の48%は社会的に要求されるかあるいは中立的な項目であつたからである。

また S. D. 尺度値に関して比較的中性的な項目だけを集めれば評価者は S. D. 基準にわずらわされず項目の内容に関して評価できるだろう。そこで Edwards ら (1964) は MMPI の項目から S. D. 尺度値 4.75~5.25 (中性点 5.0) の項目45を選んで ALA 尺度とした。しかしこの尺度での得点と S. D. 得点の間には -0.51 の相関があつた。それゆえ S. D. 次元で中性的な項目を選んだだけでは S. D. 得点との相関を無くすことはできない。Edwards ら (1963) は中性的な項目からなる尺度の得点と S. D. 得点間になぜ負の相関があるのかをつきとめ、あらためて S. D. 尺度と相関のない尺度を作ることに成功した。かれらはまず S. D. 得点の高い群、低い群を選び、各群について MMPI でない項目50 (これらは S. D. 次元ではほぼ等間隔に並んでいる) の S. D. 尺度値に関して承認の比率の回帰を見出した。両群の回帰直線の勾配は S. D. 得点の高い方が急でその交点は S. D. 次元で約 5.8 この数値は S. D. 次元の中性領域の右側にある。したがって中性的な領域では S. D. 得点の高い群の方が承認の比率は低く、S. D. 得点と中性的な項目群からなる尺度での得点の相関は負であると期待されるだろう。それに反し、もし 2 本の回帰線の交点を示す S. D. 尺度値に近い項目だけを集めたら、その尺度と S. D. 得点の相関は比較的中性無相関であろう。そこでかれらはここで得た 5.8 に近い MMPI でない項目40を選んで、そこでの得点と S. D. 得点の相関をとつたら 0.88 となり仮説は検証された。これと同じ手続きを MMPI の項目を用い VA 病院の患者について繰り返した (Edwards et al., 1964) が、.086 の相関係数を見出しここでも仮説は検証された。

(2) 第2のやりかたは Edwards が作成した S. D. 尺度や MMPI の K 尺度を用いて人格検査の項目に評価者が社会的に要求される反応を与える傾向を測定することである。S. D. 得点や K 得点は個人のこの傾向を修正できるのであろう。

(3) 第3の方法は Edwards 自身が PPS を作る際に用いた方法で、人格記述項目を S. D. 尺度値に基づいて対にし、評価者にその2項目のうちどちらか自分をより適切に記述している方を強制選択するよう教示する。その場合、対になつている項目の S. D. 尺度値を近づけ

るほど評価者の選択に S.D. の影響は減ることがわかった* (Edwards 1957b; Wright, 1957; Klett, 1956; Kelleher, 1958; Edwards & Diers, 1962)

最後に S.D. と承認の比率の相関を低める要因として Edwards ら (1959) は次のような資料を与えてくれる。PPS は210項目からなる強制選択法であるが、この項目全部を用いて S.D. と承認の比率の相関を求めた場合には .69 となるが、もし 210 項目のうち Buffalo 大学での研究 (Corah et al., 1958) におけるように 30 項目だけをとり出して短縮された PPS を作り、その S.D. と承認の比率の相関を求めると、.88 にもなる。Buffalo 大学で用いたこの 30 項を PPS 210 項目についての評価の中からチェックしその S.D. と承認の比率の相関を算出し直すと .64 である。したがって S.D. と承認の比率の間の相関もその項目のおかれている文脈に影響されることに注意すべきであると Edwards らは述べた。

Ⅲ S.D. とその他の反応の構え

人格検査の得点に及ぼす反応の構えはいくつかあげられる (Siller et al., 1963)。しかしここでは S.D. 仮説と黙認傾向仮説の関連についての文献だけを展望している。

数年前 Couch と Keniston (1969) は S.D. の研究とは独立に、心理検査の領域での重要な反応であり、しかも中心的な人格の徴候に基づく「なんにでも同意する反応の構え」(黙認傾向 acquiescent tendency の構え) についての研究を発表した。これを契機に Edwards や Taylor の「Couch らのいう黙認傾向は S.D. の一面を表わすもので、黙認傾向仮説と S.D. 仮説とは決して相容れないものではない」という主張と、Couch らの「S.D. 尺度は社会的に要求される反応を与えようという傾向よりもむしろ黙認傾向を測定しているのだ」という示唆の間に論争がくり返された (Couch et al., 1960, 1961; Edwards et al., 1961a, 1961b, 1962; Taylor, 1961)

人格検査はリッカート型の「強く賛成」から「強く反対」にわたる選択肢を用いることが多い。Couch ら (1960) はこういう型の検査ではとくに黙認傾向が重要であるとみてそれを測定する適当なものさしを作ろうとした。そこで多方面から多数の項目を収集し、リッカート法 (強く反対) (1)～強く賛成 (7) で 61 人の大学生に回答させ、特定の内容からは本質的に独立な 360 項目の黙認傾

向尺度を作った。各評価者についてこの黙認傾向尺度 360 項目に対する反応の平均をとって黙認傾向得点 (OAS) を求めた。OAS の巾は 3.1 から 4.5 平均は 3.9 で σ は 0.3、折半法による信頼度は +.85 テスト・再テスト間の相関は +.73、この 360 項目を選んだ全項目源と OAS の相関は +.94 でこの尺度は内的信頼性、整合性、一般性をそなえているとされた。

黙認傾向は他の標準テストでの「そのとおり」「はい」という傾向と高度の関係がある。たとえば MMPI の 32 尺度について承認の比率と OAS の相関をとると、主として「はい」反応に得点のかぎをおく尺度では両者に正の相関があり、主として「いいえ」反応に得点のかぎをおく尺度では両者に負の相関がある。

Edwards らとの論争の主題となるのはこの部分である。Ⅱで述べたように Edwards の S.D. 尺度での得点は「はい」、「いいえ」形式の人格検査の得点と相関がある。しかし先述のように問題は得点のかぎを「はい」、「いいえ」におくことでなく、社会的に要求される反応におくか、社会的に要求されない反応におくかということである。Edwards らは Couch らが OAS と MMPI の得点の関係は、評価者が社会的に要求されない反応を与える傾向に影響されるかもしれないというもうひとつの仮説に気づかなかつたのだと指摘した。

そこで Couch ら (1961) は OAS と Edwards の S.D. 得点との関係を検討した。Couch らの母集団について OAS と S.D. 得点の相関は -.34 で期待どおりつまり S.D. 尺度は 77% の項目が「いいえ」に得点のかぎをおくから当然負の方向を示した。これは OAS と高度に関係する他の人格変数について得た水準に比して低い。これについて Edwards ら (1961b) は OAS と S.D. 得点に負の相関があつたのは全項目の 77% が「いいえ」に得点のかぎをおくからでなく、高い OAS が低い OAS より一般に黙認傾向尺度の項目により社会的に要求されない反応をしていることを示すからだと解釈する。その根拠を Edwards らは次のように示した。かれらは黙認傾向尺度 360 項全部についてではないが Couch らにならつて賛成反対の次元で評価し、平均尺度値を求め、各カテゴリーにおける平均的な尺度値をもつ項目のパーセントを求めた。強く賛成 (0.000); 賛成 (0.000); やや賛成 (0.105); 無回答 (0.410); やや反対 (0.321); 反対 (0.152); 強く反対 (0.011) となり、S.D. 尺度値と承認の比率の直線関係から黙認傾向尺度は社会的に要求されない尺度値で重みづけられていることが示唆された。ここから OAS が高いことは社会的に要求されない反応を多くすることであり、S.D. 得点と負の相関をも

* また、この場合、社会的に要求される項目同士、要求されない項目同士を対にすると、接近接近コンフリクト、回避回避コンフリクトに似た事態が生ずることが報告された。

つことがうなづける。またこの相関が比較的低かつた理由は S.D. 尺度値に関して中性的な項目が多かつたからであろう。

Couch ら (1961) は自分の資料から独自の S.D. 尺度を発展させた。360 項目の黙認傾向尺度から高得点を得た35項目 (高平均値尺度, 平均 5.22, σ 0.35), 低得点の35項目 (低平均値尺度, 平均 2.41, σ .44) を選んだ。Edwards の考えにしたがえば, ここでの高得点は S.D. の程度の高いことで, 低得点は S.D. の程度の低いことである。これら両尺度での得点と OAS および S.D. 得点との相関をとつたが, 高低平均尺度ともに OAS とは正, Edwards の S.D. とは負の相関を示した。Couch らは高平均値尺度での得点と S.D. 得点の相関は当然正であると予想したのである。しかし Couch らの用いた高平均値尺度35項目の平均値は5.22で「やや賛成」の категорияにおちるものである。だからこの尺度は必ずしも社会的に要求される項目からなつていないわけでない。Edwards ら (1961b) はあらためてこれら35項目について46人の大学生に9点尺度法で評価をさせた。その結果, 平均的な評価6.3, σ 1.66を得たがこのcategoryは「中性的」なcategoryに隣接するものであり, ここから Couch らの推論の誤りを指摘した。

黙認傾向仮説と S.D. 仮説について Edwards と Walker (1962) はさらに資料を提供している。S.D. 得点が高いことは S.D. 尺度で「はい」と反応させがちで, 高い S.D. 得点は「いいえ」と反応させがちであることを反映しているが, この傾向は S.D. 連続体上全範囲にわたつて作用すべきである。だから高 S.D. 得点群と低 S.D. 得点群に対し, 一連の項目の S.D. 尺度値 (X) に対する承認の比率 (Y) の回帰直線は黙認解釈にしたがえば Fig. 1 のようになる。これに対して S.D. 解釈によれば Y 截片に関しては低 S.D. 得点群の方が高得点群より大きく黙認傾向解釈と一致するが, 勾配は前者の方が緩やかで両回帰直線は交わるはずである。(Fig. 2)。高 S.D. 得点群は S.D. 尺度値の低い項目を承認することが少なく, S.D. 尺度値の高い項目を承認することが多いからである。Edwards と Walker

Fig. 1

Fig. 2

(1962) は PPS からの 150 項目を大学生 237 人に S.D. 教示で与え上の仮説を検証した。

黙認傾向仮説と S.D. 仮説の関係については因子分析的研究もされている (Couch et al., 1961; Edwards 1961; Edwards & Heathers, 1962)。Edwards と Heathers (1962) は MMPI の58尺度と3つの他の人格尺度について因子分析を行なつたが, 第1因子は「社会的に要求されるような反応を与えようとする傾向」と解釈され, 第2因子は「黙認回答を与えようとする傾向」と解釈され, 第3因子は「人格項目に対する回答を偽ろうとする傾向」と解釈されることを見出した。MMPI の因子分析については, Kassebaum ら (1959) が第1因子を「自我の強さ対自我の弱さ」と解釈したが, Edwards と Heathers (1962) は「はい」—「いいえ」形式の人格検査項目に対して「社会的に要求される反応を与える傾向」と解釈した方が理に合うと主張した。Edwards ら (1960) は MMPI の各尺度と S.D. 尺度の相関と第1因子の負荷量との間に積率相関 -0.985 を見出している。

ついで Edwards (1963) は S.D. セットとその他の反応セットの関係を明らかにするため, より包括的な因子分析的研究を行なつた。かれは19の実験的な尺度を設定したが, それらの尺度を S.D. 尺度値, 得点のかきのおきかた, その反応の比率のちがひによつて統整し, S.D. の構え, 黙認傾向, 異常な反応を与える傾向, ? を与える傾向などを区別しようとした。これらの尺度には Edwards が新しく実験的に作成したもの, 既成の S.D. 尺度 Crowne と Marlowe の MCSD (1960), Wiggins の Sd (1959) 先述の Couch らの尺度 (1961) などが含まれる。110人の学生の得点に基づき, 各反応の構えの尺度間の相互相関を因子分析して, 直交回転した。その結果 S.D. 尺度と他の6つの実験的な S.D. 尺度が第1因子で最高の負荷量をもつこと, 社会的に要求されない項目に異常な承認反応をする傾向は社会的に要求される項目に異常な拒否反応をする傾向に関係があること, ? 反応をする傾向は S.D. 傾向と関係ないこと,

Couch らの尺度で高い負荷量を示したのは黙認傾向をあらわす次元ではないことなどが示された。

このような証拠を数多く発表した Edwards は結局 S.D. 仮説に対し別の仮説をもち出してくる必要を認めず, ただ自分は人格構造そのものになんの疑いをもつものではないが, 人格検査において S.D. 変数が介入するときは人格構造について論ずる説をそのままには信用しにくいと強調するのである。

V 結 び

社会的要求性の評価は Edwards の用いた一般的標準教示によると、評価の年令、性、社会・経済的地位を変えても、また評価する項目を与える文脈を変えてもほとんど影響されない。しかしたとい一般教示のもとであっても、行動基準のまったく異なる集団があるとすれば、それぞれにおいての社会的要求性の評価は異なるだろう。また Edwards の示唆にあるように特殊の教示によつたり、Cowen らのように個々の項目を分析することによつて集団間の社会的要求性の評価も異なることが予想されるので、なお検討の余地は残される。

自己評価をするような場合、社会的に要求される回答をしようとする傾向はぬぐいされないほど強いが、これも個人個人についての分析がもっと進められなければならない。また社会的に要求される回答をしようとする傾向を個人の行動の動機づける要因として働くものと解するなら、Marlowe らの主張するように社会的承認の要求との関連で S.D. 尺度そのものをみなす必要がある。

これらの文献を展望してきて、われわれの日常言語は知らず知らずのうちに一般的標準的、~~い~~かも漠然とした規範いかに強く影響されているかが知られ興味深い。が同時にあらためてわれわれに影響を与える「社会」というものは何かを問ひなおす必要を感じる。

『附記 この原稿提出にあたり、渡英を控えた東京都立大学辻正三先生にはご多忙中にもかかわらず原稿を読んでいただきご注意を賜りました。厚く御礼申しあげます。また貴重な文献を種々提供してくださつたワシントン大学の Allen L. Edwards 教授、ロチェスター大学の Emory L. Cowen 教授に心からの謝意を捧げます。なお脱稿後に Edwards 教授からかれ自身のこれまでの研究成果を概説した1964年の Nebraska Symposium での報告が贈られましたが、ここでは割愛させていただきます。

(1964年6月18日原稿受付)

Bill, R. E. *Manual for the index of adjustment and values*. Auburn: Alabama Polytech. Inst., 1958.

Block, J. Some differences between the concepts of social desirability and adjustment. *J. consult. Psychol.*, 1962, 26, 527-530.

Boe, E. E. & Kogan, W. S. Social desirability response set in the individual. *J. consult. Psychol.*, 1963, 27, 369.

Buss, A. H. The effect of item style on social desirability and frequency of endorsement. *J. consult. Psychol.*, 1959, 23, 510-513.

Cooper, A., & Cowen, E. L. The social desirability of trait descriptive terms: a study of feeling reactions to adjective descriptions. *J. soc. Psychol.*, 1962, 56, 207-215.

Corah, N. L., Feldman, M. J., Cohen, I. S., Gruen, W., Meadow, A., & Ringwall, E. A. Social desirability as a variable in the Edwards Personal Preference Schedule. *J. consult. Psychol.*, 1958, 22, 70-72.

Couch, A., & Keniston, K. Yeasayers and nay-sayers: Agreeing response set as a personality variable. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1960, 60, 151-174.

Couch, A., & Keniston, K. Agreeing response set and social desirability. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1961, 62, 175-179.

Cowen, E. L. The social desirability of trait descriptive terms: preliminary norms and sex differences. *J. soc. Psychol.*, 1961, 53, 225-233.

Cowen, E. L., & Stiller, A. The social desirability of trait descriptive terms: order and context effects. *Canad. J. Psychol.*, 1959, 13, 193-199.

Cowen, E. L., & Stricker, G. The social desirability of trait descriptive terms: a sample of sexual offenders. *J. soc. Psychol.*, 1963, 59, 307-315.

Cowen, E. L., & Tongas, P. N. The social desirability of trait descriptive terms: application to a self-concept inventory. *J. consult. Psychol.*, 1959, 23, 361-365.

Cowen, E. L., Budin, W., & Budin, F. A. The social desirability of trait descriptive terms: a variation in instructional set. *J. soc. Psychol.*, 1961, 53, 317-323.

Cowen, E. L., Budin, W., Wolitzky, D. L., & Stiller, A. The social desirability of trait descriptive terms: a factor in the prediction of Q-sort. *J. Pers.*, 1960, 28, 530-544.

Cowen, E. L., Davol, S. H., Reimanis, C., & Stiller, A. The social desirability of trait descriptive terms: two geriatric samples. *J. soc. Psychol.*, 1962, 56, 217-225.

Cowen, E. L., Staiman, M. G., & Wolitzky, D. L. The social desirability of trait descriptive

terms: applications to a schizophrenic sample. *J. soc. Psychol.*, 1961, 54, 37-45.

Cronbach, L. J. Response sets and test validity. *Educ. Psychol. Measmt.*, 1946, 6, 475-494.

Crowne, D. P., & Marlowe, D. H. A new scale of social desirability independent of psychopathology. *J. consult. psychol.*, 1960, 24, 349-354.

Cruse, D. B. Social desirable responses in relation to grade level. *Child Develpm.*, 1963, 34, 779-789.

DeSoto, C. B., Kueth, J. L., & Bosley, J. J. A redefinition of social desirability. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1959, 58, 273-275.

Edwards, A. L. The relationship between the judged desirability of a trait and the probability that the trait will be endorsed. *J. appl. Psychol.*, 1953a, 37, 90-93.

Edwards, A. L. *Manual for the Edwards Personal Preference Schedule* New York: Psychol. Corp., 1953b.

Edwards, A. L. Social desirability and Q sort. *J. consult. Psychol.*, 1955, 19, 462.

Edwards, A. L. Social desirability and probability of endorsement of items in the Interpersonal Check List. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1957a, 55, 394-396.

Edwards, A. L. *The social desirability assessment and research*, New York: Dryden, 1957b.

Edwards, A. L. Social desirability and the descriptive of others. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1959a, 59, 434-436.

Edwards, A. L. Social desirability and personality test construction. In B. M. Bass, & I. A. Berg (Eds.), *Objective approaches to personality assessment*. New York: Van Nostrand, 1959b.

Edwards, A. L. A factor analysis of experimental social desirability and response set scales. *J. appl. Psychol.*, 1963, 47, 308-316.

Edwards, A. L., & Diers, C. J. Social desirability and conflict. *J. soc. Psychol.*, 1962, 58, 349-356.

Edwards, A. L., & Diers, C. J. Neutral items as a measure of acquiescence. *Educ. Psychol. Measmt.*, 1963, 23, 687-698.

Edwards, A. L., & Heathers, L. B. The first

factor of the MMPI: social desirability or ego strength? *J. consult. Psychol.*, 1962, 26, 99-100.

Edwards, A. L., & Walker, J. N. A note on the Couch & Keniston measure of agreement response set. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1961a, 62, 173-174.

Edwards, A. L., & Walker, J. N. Social desirability and agreeing response set. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1961b, 62, 180-183.

Edwards, A. L., & Walker, J. N. Relationship between probability of item endorsement and social desirability scale value for high and low groups on Edwards' SD scale. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1962, 64, 458-460.

Edwards, A. L., Diers, C. J., & Walker, J. N. Response sets and factor loadings on sixty-one personality scales. *J. appl. Psychol.*, 1962, 46, 220-225.

Edwards, A. L., Gocka, E. F., & Holloway, H. The development of an MMPI acquiescence scale. *J. clin. Psychol.*, 1964, 20, 148-150.

Edwards, A. L., Heathers, L. B., & Fordyce, W. E. Correlations of new MMPI scales with Edwards SD scale. *J. clin. Psychol.*, 1960, 16, 26-29.

Edwards, A. L., Wright, C. E., & Lunneborg, C. E. A note on "social desirability as a variable in the Edwards Personal Preference Schedule." *J. consult. Psychol.*, 1959, 23, 558.

Fordyce, W. E. Social desirability in the MMPI. *J. consult. Psychol.*, 1956, 20, 171-175.

Fujita, B. Applicability of Edwards Personal Preference Schedule to Nisei. *Psychol. Rep.*, 1957, 3, 518-519.

Goldfried, M. R., & McKenzie, J. D., Jr. Sex differences in the effect of item style on social desirability and frequency of endorsement. *J. consult. Psychol.*, 1962, 26, 126-128.

Goodstein, L. D., & Heilbrun, A. B. Jr. The relationship between personal and social desirability scale values of the EPPS. *J. consult. Psychol.*, 1959, 23, 183.

Hanley, C. Social desirability and responses to items from three MMPI scales: D, Sc and K. *J. appl. Psychol.*, 1956, 40, 324-328.

Heilbrun, A. B., Jr., & Goodstein, L. D. The

relationships between individually defined and group defined social desirability and performance on the Edwards personal preference schedule. *J. consult. Psychol.*, 1961, 25, 200-204.

Helson, H. Adaptation level as a basis for a quantitative theory of frames of reference. *Psychol. Rev.*, 1948, 55, 297-313.

Kelleher, D. The social desirability factor in Edwards' personal preference schedule. *J. consult. Psychol.*, 1958, 22, 100.

Kassebaum, G. G., Couch, A. S., & Slater, P. E. The factorial dimensions of the MMPI. *J. consult. Psychol.*, 1959, 23, 226-236.

Kenny, D. T. The influence of social desirability on discrepancy measures between real and actual self. *J. consult. Psychol.*, 1956, 20, 315-319.

Klett, C. J. A study of the Edwards Personal Preference Schedule in relation to socio-economic status. Unpublished doctoral dissertation, Univ. of Washington, 1956. Edwards, 1957b.

Kogan, K. L. Endorsement of social desirability as a meaningful dimension of response. *J. clin. Psychol.*, 1962, 18, 348-349.

Kogan, K. L., & Kogan, W. S. Social desirability scale values of items in the Interpersonal Check List. Personal communication ... Edwards, 1957b.

Kogan, W. S., Quinn, R. D., Ax, A. F., & Ripley, H. S. Some methodological problems in the quantification of clinical assessment by Q-array. *J. consult. Psychol.*, 1957, 21, 57-62.

Lovaas, O. I. Social desirability ratings personality variables by Norwegian and American college students. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1958, 57, 124.

Marlowe, D. H., & Crowne, D. P. Social desirability and response to perceived situational demands. *J. consult. Psychol.*, 1961, 25, 109-115.

Mehlman, B., & Warehime, R. G. Social class and social desirability. *J. soc. Psychol.*, 1962, 58, 167-170.

Milgram, N. A., & Helper, M. M. The social desirability set in individual and grouped self-ratings. *J. consult. Psychol.*, 1961, 25, 91.

Norman, R. P. Social desirability and self-evaluation in chronic schizophrenics. *J. clin.*

Psychol., 1962, 18, 249-250.

Norman, R. P. Level of aspiration and social desirability in chronic schizophrenics. *J. consult. Psychol.*, 1963, 27, 40-44.

大石明子 親子関係の規範意識と実践意識について—その社会的要求性との関連—教育心理学研究 1962, 10, 215-224

大石明子 個人特性評価における社会的要求性—矢田部・ギルフォード性格検査について—心理学研究 1964, 34, 295-298.

Rosen, E. Self-appraisal, personality desirability, and perceived social desirability of personality traits. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1956, 52, 151-158.

Siller, J., & Chipman, A. Response set paralysis: Implications for measurement and control. *J. consult. Psychol.*, 1963, 27, 432-438.

Sperber, Z., & Spanner, M. Social desirability, psychopathology, and item endorsement. *J. gen. Psychol.*, 1962, 67, 105-112.

Taylor, J. B. Social desirability and MMPI performance: the individual case. *J. consult. Psychol.*, 1959, 23, 514-517.

Taylor, J. B. 'Yeasayer' and social desirability: a comment of the Couch and Keniston paper. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1961a, 62, 172.

Taylor, J. B. What do attitude scales measure: The problem of social desirability. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1961b, 62, 386-390.

Thurstone, L. L. *The measurement of values*. Chicago: Univ. Chicago Press. 1959.

Wiener, M., Segman, S., Blumberg, A., & Cooper, A. Judgment of adjustment by psychologists, psychiatric social workers and college students, and its relationship to social desirability. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1959, 59, 315-321.

Wiggins, J. S., & Rumrill, C. Social desirability in the MMPI and Welsh's Factor scales A and R. *J. consult. Psychol.*, 1959, 23, 100-106.

Wright, C. E. Relations between normative and ipsative measures of personality. Unpublished doctoral dissertation, Univ. of Washington, 1957.

Zax, M., Cowan, E. L., Budin, W., & Biggs, C. F. The social desirability of trait descriptive terms: application to an alcoholic sample. *J. soc. Psychol.*, 1962, 56, 21-27.